

1行あける（作成時削除のこと、以下同様）

題 目

1行あける 登壇者につける（作成時削除のこと）

所属 氏 名, 所属 氏 名

1行あける

Paper Title (英文題目)

Affiliation Taro SEIMITSU, Hanako SEIMITSU (英文所属・氏名)

Abstract of 100 words or so should be written in English here.

英文アブストラクトには、研究内容が把握できるわかりやすい文章を 100-200word 程度で書いて下さい。

1行あける

本文

テンプレートの使い方

上記「本文」から最終行まで（青色の文字の部分すべて）は本文作成時には削除してお使い下さい。

文章を書く際には、スタイルを有効利用すると楽です。Wordの画面の左上は下図のようになっています。ここで、標準と書いてある窓がスタイル設定の所です。の所を押すと登録されているスタイルの一覧が出てきますので、その中から適当なものを選ぶと、段落の設定、フォントの設定などが自動的に選択されます。



このテンプレートで設定されているスタイルには次のようなものがあります。

見出し1, 見出し2, 見出し3, 標準, Equation, 題目, 著者, 本文, 本文下げ, 段落フォント

このうち、黄緑色で示されているものは題目等のためのスタイルで、既にその場所にスタイルが設定されていますので、特にその内容を知る必要はないと考えられます。よく使うのはそれ以外のスタイルで、これについて説明します。

見出し1: MS ゴシックと arial。章の見出しに使います。

見出し2: 設定は見出し1と同じ。節に使います。

見出し3: 文字の設定は見出し1と同じですが、中央揃えになっています。

標準: スタイルのもとなっているものなのでいじらないこと。使う必要はありません。

本文: 通常の文章を入力するためのスタイルです。次の（本文下げ）のスタイルとの差に注意して下さい。

本文下げ: 日本語を入力するには、段落の最初は一文字あけて書き始めます。これをするためにスペースを入力する方法がありますが、Wordではこのときスペースの横幅を勝手に変えてしまう事があります。これでは見栄えが悪いので、常に段落の最初に1文字分のスペースを確保したのがこのスタイルです。このスタイルを使えば段落の最初にスペースを入力する必要はありません。前項のスタイル（本文）の違いはこの点だけです。

Equation: 数式を入力する際に使います。数式の後タブキーを押すことによって式番号が行の終わりに来るように設定でき

ます。

$$y = ax + b \quad (1)$$

その他、書式スタイルを選択し、全てのスタイルを表示させると Word で事前に登録されているスタイルを全て表示することができます。便利なものがあるかもしれません（例えば箇条書きなど）。また、各種の設定を行った後、スタイルの窓に適当な名前を入力することによって新しいスタイルを作ることできます。

精密工学会 学術講演会用原稿の書き方

1. 原稿レイアウトの方法

- 1) 原稿は書式設定のできるワープロ(DTP ソフト)で作成することを基本とします。
- 2) サイズ・枚数: A4 版 2 ページとします。3 ページ以上のものは受け付けません。
- 3) マージン: 上 22mm, 下 22mm, 左 19mm, 右 19mm。論文は上記枠内に収まるようにしてください。(上記の枠からはみ出した原稿は再度作成していただくことがあります。)
- 4) 文字も含め、色の制限はありません。ただし、モノクロプリンタで出力したときにも区別できるように色使いにご注意ください。
- 5) 文字の大きさ: 8.5 ポイントを標準とします。文字数、行間については特に制約を設けておりませんが、本テンプレートを参考にお書き下さい。図や表の文字も本文と同様読みやすい大きさで書いてください。
- 6) 題目: 1行あけた2行目の中央に書いてください。所属・氏名: 題目との間を1行あけて書いてください。連名の場合、登壇者の氏名の頭に を付けて下さい。講演申込書に書かれたものと変わらないように注意してください。
- 7) 本文:

次の3項目を必ず盛り込んでください。

- (1) 研究の目的・意義, (2) 研究の方法, (3) 研究の結果とその意味

紙面の大部分を図面や数式に用い、当日口頭で説明するような書き方や、「...詳細は当日の発表にゆずる」、「...については当日述べる」等の表現は避けてください。

速報的なものでも、構成はできるだけ上記に従って下さい。もちろん原稿執筆時点以後の研究の進展を当日付け加えて発表することは歓迎いたします。

講演を聴講しない人にも研究内容が理解できるように、構成、図面の選択など、十分に検討してください。